

QUARTET

九州大学四国県人会が故郷四国を発信するフリーペーパー、カルテット。

四万十の大自然のなかで
のんびりと素敵な旅を。

vol. 7
2016.04

特集 | 黒潮・四万十

QUARTET vol.7

発行日：2016年4月7日(2016年春号)

発行：九州大学四国県人会



SHIKOKU
KENJINKAI
of Kyushu University

Take
Free

QUARTET

四重奏、カルテット。

vol.7

四国には雄大な自然が広がっています。

それぞれの県でも、そこにある自然を活かした

素敵な取り組みがなされています。

四国へ足を伸ばして、大自然に触れ、

日々の疲れを癒やしませんか？

2016年 春号

CONTENTS



01 特集 高知県 黒潮・四万十

海洋堂ホビー館・かっぱ館・ホビートレイン

四万十の碧

三里沈下橋

道の駅なぶら土佐佐賀

居酒屋ポコペン

12 コラム 四国人以外からみた四国

サンリバー四万十

15 編集後記

表紙の写真 >>>



四万十川 三里沈下橋

日本最後の四万十川にかかる沈下橋のうち、
下流から数えて2本目のもの。
川の岸边では、ゆったりとした時間が流れ、
訪れた人々を癒やしてくれる。
四万十川については6ページを御覧ください。

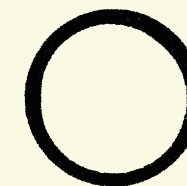
SHIN
KURUSHIMA
SOMETHING NEW.

船
ぞ
つ
た
。

乗
り
物
は
、

は
じ
め
て
創
っ
た

人
類
が
、



は
る
が
た
昔
。

この乗り物を最初に創った
のがこの名も無き挑戦者が
ひれぼの夢と情熱をもって
その船づくりは挑んだのが、
わろしえちは、知っている。

彼の眼前にどこまでも続く
蒼く美しく広がる水平線が
その船づくりは臨む情熱を
ひれぼは強く掻き立てたのが、
わろしえちは、知っている。

何千年もの時代が過ぎても
その挑戦者の夢と情熱とは、
わろしえち技術者達の胸に
今も変わらぬ、生きている。

船造りには、ロマンがある。

でっかい仕事で、
いこうじゃないか。

見上げた、仕事だ。

 **新来島どつく**
http://www.skdy.co.jp

[本社] 東京都千代田区丸の内1丁目7番12号 サビアタワー13階
[大西工場] 愛媛県今治市大西町新町甲945番地
TEL. 0898-36-5511 E-mail jinzai@skdy.co.jp

特集 高知県 黒潮・四万十



【中村駅（四万十市）まで】
 JR 高知駅より
 特急「あしずり」で
 最速1時間45分
 高知龍馬空港から
 車で2時間半
 高知駅から
 車で2時間15分

海洋堂ホビー館 かつば館 ホビートレイン



△ミュージアムに入るとこの大きな「カタロニア船」が目に入る。上がることができ、船内でも展示を行っている。

四万十の山奥に今話題のミュージアムがある。「予予線打井川駅から車で細い山道を数キロ進む。こんなところにギャラリーがあるのだろうかと思っていると青色のひと際目を惹く建物が現れる。そして「へんびなミュージアムへようこそ」というのぼりが出てくれる。このミュージアムは廃校となった打井川小学校を改装して作られた。海洋堂とは海洋堂ホビー館・かつば館館長である宮脇修氏が大阪でたった1畳半のプラモデル店を創業したのが始まりで、以後「創るものは夜空にきらめく星の数ほど無限にある」を掲げ、食玩やフィギュアジャンルを中心に2000種を超えるありとあらゆるものをモチーフとした立体作品を世に送り出してきた。

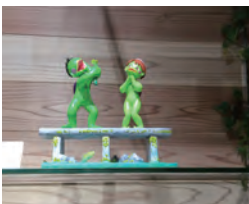
館内に足を踏み入れて一番初めに目に飛び込んでくるのは大きな船である。これは海洋堂が1970年代にプロデュースした「カタロニア船」をモチーフに開館の際に作られ、木材を館内に運び、地元の船大工が作製した。
 ホビー館にはアニメのキャラクター、動物、戦闘機、建築物など海洋堂が今まで手掛けた作品が数多く展示されており見る人を飽きさせない。私も細部まで作りこまれた動物のフィギュアに見入ってしまった。展示も作品それぞれをじっくり見てもらえるように工夫されている。客層はいわゆる「オタク」と呼ばれる人は全体の1%ほどで、中年や年配の方、若い家族連れなど客層は様々だ。フィギュアにあまり興味がないという人も十分楽しめる。企画展示は年に3回ほど行われており、私たちが訪れた時には海洋堂の造形師が手掛けたエヴァンゲリオンが展示されていた。エヴァンゲリオンに関してあまり知識のない私も細かいところまで施された意匠に感心した。2年に1回のペースで展示物の変更も行われており、このミュージアムは何回訪れても楽しめる。

ではなぜ山奥にこのようなミュージアムができたのだろうか？館長の宮脇修氏は高知県黒潮町出身で、いつか高知に海洋堂のミュージアムを作りたいという希望を持っていた。ある時宮脇氏は打井川にある馬之助神社に彼の父親が最初に祠を建てたことを知る。この地に縁があるということ、打井川小学校跡を訪れた際にミュージアムのイメージが湧いたことからこの地での開館を決めた。

はじめはこんなところに人が来てくれるのだろうかという懸念があった。しかしながらこのような心配は不要であった。当初年間3万人を目標としていたがその目標はその年の夏休みに超えた。人影少ない山村の地域活性化に大きく貢献している。行政との協力も盛んに行われており、大型バスが通れるように道路整備が行われている。

会長はホビー館だけでは滞在時間が短いのでお客様により満足してもらおうべくホビー館の近くに海洋堂かつば館をオープンさせた。海洋堂かつば館には全国の老若男女が作った約1300体のかつばが展示されている。どれも相当な工夫がなされており作者の苦労が感じられる。かわいいかつばから迫力あるかつばまでユーモアあふれるかつばが勢ぞろいしており独特な空間になっている。建物の細部にも工夫が凝らされており、洗面所の蛇口はきゅうりを模している。「かつばがはいってくるので扉を開けてください」と書かれている張り紙は遊び心満載だ。ここを訪れるとかつばの世界にいざなわれること間違いなし。

ホビー館・かつば館にはここでしか味わえない魅力が山ほどある。皆さんもぜひ「へんびなミュージアム」にいらしてはどうだろうか。



四万十川流域をゆったりと走る「予予線」には海洋堂とコラボレーションした列車が走っている。「海洋堂ホビートレイン」だ。海洋堂ホビー館が開館するのを機に走り始めた。見かけはとも派手だが、四万十川の景色とのギャップもまた良い。2代目となる現在は青を基調とし、エヴァンゲリオンをモチーフにしているという。車内は外観に合わせた雰囲気になっており海洋堂のフィギュアも展示されている。海洋堂ホビートレインで四万十川を観光し、ホビー館・かつば館を訪れることができる。



海洋堂ホビー館

〒786-0322
 高知県高岡郡四万十町打井川 1458-1
 TEL 0880-29-3355



海洋堂かつば館

〒786-0322
 高知県高岡郡四万十町打井川 685-1
 TEL 0880-29-3678



日本最後の清流 四万十川

碧の十萬四

三里沈下橋から、数隻の船が止まっているの見える。これは、「四万十の碧（あお）」の観光用の屋形船である。遊覧コースは、三里沈下橋の真下をくぐり、佐田沈下橋のすぐ近くまで行つて、もとの場所までUターンするというものだ。船は小ささまざまなサイズがそろえられている。また、船の座敷に座って、窓の中から景色を楽しむという形式なので、寒い冬の日を訪れても平気である。予約すれば、遊覧しながら川魚の料理を堪能できる。

船頭さんが屋形船を操縦する傍ら、にこにこ笑顔で四万十川の雄大な自然や沈下橋について解説をしてくださった。四万十川には鮎うなぎ、川エビなどの多くの野生生物が生息しているらしく、実際に川のほとりの花々や野鳥を屋形船から間近で見ることができた。四万十川の自然に触れながらのんびり過ごした至福の50分があったという間であった。せっかく四万十川へ行くならば、屋形船に乗って雄大な自然を身近に感じてもらいたい。



△屋形船から、折り返し地点の佐田沈下橋をのぞむ



△屋形船の中は快適！

土佐くろしお鉄道中村駅から車で20分。三里沈下橋へ行く途中の曲がりくねった山道をドライブ

していると、木々の隙間から四万十川の綺麗な水面が見えてくる。「沈下橋」というのは、欄干のない狭い橋のことである。この三里沈下橋は四万十川の下流から数えて2本目で、長さ145.8メートル、幅員は3.3メートルである。自動車は通行可能で、スリリングなドライブを味わうことができる。地元の自動車学校では、希望すれば路上教習のコースに沈下橋を組み込むことができるそうだ。

この沈下橋は、2012年に放送された映画「運命のヒマワリ」のロケ地になったようだ。俳優の生田斗真さんや女優の真木よう子さんは、ドラマの撮影をしながら、まさにこの沈下橋を渡っていたのだ。

この沈下橋の上からは、川底や水中を泳ぐ魚を見ることが出来る。川のせせらぎや春を感じさせるウグイスのさえずりは、時間が過ぎていくのを忘れさせてしまう。初めて来たにも関わらず、「ふるさと」のメロディが脳裏をよぎるようなどこか懐かしい感覚だった。我々取材班も、沈下橋のよく見える川のほとりでしばらくぼんやり。

ぜひとも三里沈下橋を訪れて、日常の慌たしい生活を忘れ去ることができるような素敵なひとときを味わってほしい。

三里沈下橋



△横から見るとこんな感じ。なんと、欄干がない！



△大や猫の目線だとこんな感じ？

三里沈下橋
〒787-0037
高知県四万十市三里



四万十の碧
〒787-0037
高知県四万十市三里 1446
TEL 080-38-2000
年中無休 8:30 ~ 16:30

入野松原



さらさら砂の、落ち着いた海岸。
夕日を見ながらゆったり過ごしてみませんか？

土佐くろしお鉄道中村線の車窓に突然どこまでも続く松原が目飛び込んでくる。土佐入野駅で下車して徒歩で約10分のところに入野海岸・入野松原はある。入野海岸・入野松原では全長約4キロに及ぶ海岸線と背後に広がる松原を見ることが出来る。松原は16世紀に防風のために植林されたことが起源とされ、数百年の歴史があり現在に至る。3月だったこともあり砂浜の人影はまばらで私たちが訪ねたときは1組のカップルと部活帰りの男子高校生がいただけだ。周囲に聞こえるのは波の音だけ。サラサラした砂浜には足跡がきれいに残っていて、波風も気持ちよい。松原に消えてゆく夕日も絶景だ。海岸がある黒潮町では広がる風景それぞれを「作品」として捉える「砂浜美術館」を掲げている。一面に広がる砂浜、松原のありのままの姿から自然の営みやそこで暮らす人の営みを感じ取ることが出来る。



入野松原

〒789-1981 幡多郡黒潮町入野

小京都 中村の町並み



△不破八幡宮 重要文化財に指定。



△小京都 中村 町が基盤の目になっている。
(Google Mapより地図引用)



△四万十市立郷土資料館
中村村跡に建つ、城の形をした資料館。

【上2枚写真：いずれも四万十市 HP より引用】
(<http://www.city.shimanto.lg.jp/topj.html>)

高知県西部の中心都市である四万十市中村地区。中村は土佐の小京都と呼ばれており、今から550年前に一統氏が応仁の乱をさけて京から下向したのが発祥だ。一統氏は京をしのんで町を基盤の目に作り、祇園、京町、鴨川、東山などの地名が今なお残る。大文字の送り火なども昔から行われている。中村には国の重

要文化財である不破八幡宮や中村村跡など、一統時代・藩政時代の歴史を感じさせるスポットが数多くある。四万十地域といえば川、山などの自然が一番に思いつくかもしれないが、このような歴史の足跡に触れられるのも中村の魅力の一つだ。

私たちは中村駅から車で10分のところにある安並水車の里を訪れた。中村村跡のふもとに広がる田園地帯に15基ほどの水車が回っている。そこに鳴り響くカタンコットンという水車の音と、水が落ちる音を聞いていると心が癒される。現在水田に水をくみ上げるために使われて

いる水車はほとんどなく、観光用が大半であるが、田園地帯に風車が回る姿は日本の原風景を感じさせてくれる。紫陽花が咲く6月ごろの景色は一段と素晴らしいそうだ。

安並水車の里

安並水車の里

〒787-0008 高知県四万十市安並
TEL 0880-35-4171



さんまの焼き寿司

店員さんのおすすめ。
さんまと、しそがピッタリとマッチしている。
さんまの脂がジューシーであるが、さっぱりとした味わいである。
頭の部分は、バリバリで香ばしい。
一つでさんま一匹を味わえる、贅沢な一品。

ウツボの唐揚げ

塩が天ぶらの味を引き立てていて、あっさりとしており食べやすい。
鶏皮のような、白身魚のような味わい。
添えられたレモンを絞って食べても good!!



カツオ餃子

餃子の皮の中に、カツオのジューシーさが閉じ込められており、噛んだ瞬間に香りがフワーツと口の中に広がる。
一般的な肉の餃子よりも、あっさりしている。



マンボウのスタミナ炒め

イカに似た食感。肉厚で弾力性がある。
プリプリ+コリコリと表現するのがふさわしい。
チンジャオロースーのタケノコがマンボウに変わったような家庭的な味で、絶品。



居酒屋 ポコペン

土佐入野駅を出てすぐに、レトロな外観の居酒屋がある。高知県でとれた食材を存分に生かしたメニューを提供している、居酒屋ポコペンである。私たち取材班が店内に入ると、威勢のいい声で出迎えられる。レトロでおしゃれなメニュー表には、リーズナブルで美味しそうな食べ物がいっぱい並ぶ。ウツボやマンボウなど、なかなか食材としては目にする機

会が少ないものまであった。取材班の陣身の食レポから、料理の美味しさを想像していただきたい。そして、高知の豊かな自然が産んだ美味しい食材をぜひともこの店で味わってほしい。



道の駅 なぶら土佐佐賀



土佐くろしお鉄道の土佐佐賀駅で電車を降り、国道沿いを歩いていくと、木のぬくもりが感じられるオシャレな建物が見えてくる。これは、今年で出来て2年目の「道の駅なぶら土佐佐賀」である。「なぶら」というのは、イワシなどの群れが水面を波打たせる様子を表す言葉だ。ここは、地元でとれた自然素材や、それらを生かして作られたものが販売されており、黒潮町の町おこしで重要な役割を担っている。道の駅に出したものが人々に売られ、生産者の「もっと出したい」という意欲が生まれることが、一次産業の活性につながるのだと道の駅のインフォメーション係の方は言う。道の駅のスタッフさんからお話を聞いたり、店内を歩き回ったりしていると、黒潮町で取れる食材の中でも特に鰹に力を入れていることがよくわかる。「鰹」と聞けば、たきや鰹節を思いついた読者が多いのではないだろうか。ここでは、たきほもろんのこと、カレー、コロケ、メンチカツなどの鰹を存分に生かした多様なメニューが販売されている。どの食材もしっかりと鰹の風味が生かされておおり、「おいしい」の一言だけでは表しきれない。カレーは生魚が苦手な外国人の方でもおいしく食べられるそうだ。私が特におすすめしたいのは、「黒潮鰹丼」である。ふっくら白米の上に鰹の塩たたき、ニラとしめじのかき揚げと鰹をぼろが乗った、一杯で黒潮町の名産品を網羅できるという欲張りな逸品だ。



△左から順に鰹メンチカツ、鰹コロケ、黒潮かつお丼、土佐かつお丼。こちらの写真は、取材班のために用意してくださった試食用なので実際のもは、もっと豪華！どれもおいしくてリピーターになること間違いなし！

ここ「道の駅なぶら土佐佐賀」は、地元食材の生産者の意欲を沸かせ、おいしい食材によって客を満足させるだけではないと、マネージャーさんは優しく微笑む。道の駅が活気づいていくのに大切なのは、生産者と客と、あともう一つの要素がある。そう、従業員だ。従業員が安心して働けるよう働きやすく楽しい職場を目指しているそうだ。訪れる客にも、地元の人にも、働く人にも優しい道の駅である。

せっかくなら高知県西部に足を伸ばすならば、ちよつとひと息ついてみてはいかがだろうか。

道の駅なぶら土佐佐賀

〒789-1721
高知県幡多郡黒潮町佐賀 1350 番地
電話：0880-55-3325

フードコート 9:00～18:00 (LO17:45)
直販所 8:00～18:00
休館日は月によって異なるので、HPにて要確認
(<http://nabura-tosasaga.com/>)

居酒屋ポコペン

〒789-1931
高知県幡多郡黒潮町入野 2014-7
TEL 0880-43-1287
17:00～21:00 月曜定休



コラム 四国人以外から見た四国

—— 佐賀県佐賀市出身 中村英介 初めての四国 ——

【はじめに】

春休み前、大学生である私は「せっかくの大学生の春休み、なにか楽しいことをして最高の思い出を作りたい。」と思っていました。そう思っていたある日、四国県人会というサークルに所属する田辺さんと早瀬さんに「九州出身の人からみた四国の感想を記事に取り入れたい。」ということで、高知取材旅行のお誘いが来ました。佐賀県出身の私は生まれてから今まで四国には行ったことがなかったので、きつと印象深い旅行になるだろうと思い、高知取材旅行に参加させてもらうことに決めました。

【道の駅なぶら土佐佐賀】

取材旅行一日目、四国県人会の早瀬さんと田辺さんに連れられ土佐佐賀駅で車を降り、徒歩数分ほどで最初の目的地、道の駅なぶら土佐佐賀に到着しました。道の駅なぶら土佐佐賀では、そこで働く職員さんにお話を聞かせていただきました。職員さん曰く「土佐佐賀は鯉ときのこの町」とのこと、九州内で山の幸・海の幸のどちらか片方を堪能できる町は知っていました、その両方を一つの町にて堪能することができる町を高知にて初めて知りました。

【四万十川・四万十の碧】

晴れの日が続いた朝に四万十川に訪れました。まず四万十川の三里沈下橋を渡りました。取材当日は、とても静かであり、鳥の声だけが聞こえました。澄み渡った広大な四万十の清流が緑の山々を映しており、私たちはじつと感慨にふけりました。その後、屋形船にてガイドさんの話を聞きながら、四万十川を下りました。四万十川にはいくつもの支流があり、雨が降った日には水かさが増し、暴れ川になるそうです。また、四万十川では鮎漁や遊泳が行われたり、四季折々の情景を楽しんだりできるそうです。また、違う季節にも高知を訪れたいと思いました。

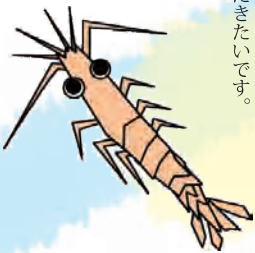
【四万十のうまいもん いちもん家】

【物産館 あるね館】

四万十のうまいもんいちもん家では、四万十ポークや川魚などの地元の食材を使用した料理が提供されていました。メニューをみて受けた印象は、実に様々な食材が生産されているのだなということですね。同様に土佐日記や鯉せんべいなどいろいろなお土産もありました。職員さんが丁寧にもてなしてくださったのもいちもん家、あるね館の魅力でしょう。

【入野松原・居酒屋ポコベン】

土佐入野駅で下車し、駅付近の入野松原を散策しました。入野松原では、まず青く雄大な太平洋が目に飛び込み、白く開放感のある砂浜が広がっており、そこには小さな砂のアートがありました。その後、居酒屋ポコベンに足を運びました。まずポコベンのメニューをみて驚いたことは鯉、清水サバ、秋刀魚、ウツボ、マンボウといった様々な魚を活用した料理が提供されていたことです。いただいたどの料理も舌鼓を打つ素晴らしい料理でしたが、個人的に最も印象に残った料理は鯉の餃子です。餃子の皮が鯉の上品な旨みを余すことなく包み込んでいる逸品であり、高知まで来た食べにきたいと思わせるほどのものでした。ぜひ私以外の九州の方にも同じ感動を分かち合っていたきたいです。



【海洋堂ホビー館】

建物の前で北斗の拳のケンシロウが出迎えてくれる海洋堂ホビー館には、フィギュアは人物、動物、乗り物、アニメキャラクター等、実に多種多様なフィギュアが展示されており、夢中で写真を撮っていました。同じキャラクターをモデルにしたフィギュアでも製作者によって表情や動きなど受ける印象が異なります。偶然にも取材当日にはエヴァンゲリオンフェアが開催されました。エヴァンゲリオンフェアでは、アニメの名シーンをダイナミックかつドラマチックに表現していました。解説とともに精巧に制作されたフィギュアやジオラマがあったため、アニメを一話しか見ていない私でもエヴァンゲリオンの世界に浸ることができました。海洋堂ホビー館にて久々に童心に返ることができました。

【おわりに】

高知は山・川・海の幸といった自然の幸に恵まれ、四季折々の魅力を感じ取ることができるといえる印象を受けました。ぜひ、九州の方々にも高知を満喫していただきたいですね。余談ではございますが、高知には地名に「佐賀」や「中村」があり、佐賀出身の中村としては妙な親近感を覚えました。取材旅行に誘ってくださり高知の魅力を知る機会をくださった四国県人会の皆さま、お忙しい中、快く取材に応じてくださいました高知の皆さまに感謝するとともにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



編集記

この度は、QUARTET 第7号を手にとりいただき、ありがとうございます。今号は、高知県四万十と黒潮をテーマとして、四国の魅力を発信させていただくこととなりました。「四国人以外から見た四国」というテーマでコラムも組ませていただきました。この冊子がきっかけで、四国に行ったことがない人々が四国に興味をもつこと、あるいは四国の人が四国の魅力の再発見をするきっかけになれば幸いです。今号の発刊に伴いまして、準備段階や取材旅行において、高知県の方々、九州大学の学生にもお世話になりました。人々の温かさに触れられた、良き取材旅行になったと思います。関わって下さった皆様へ、心より感謝いたします。

編集長 田辺 梨紗

取材旅行の思い出

しあわせ まんぞく とさ(土佐)のたび
Risa Tanabe
 ころも うっとり ちょーたのしい!
Naoto Hayase
 かつおをたべるよ つぎつぎと! おなかいっぱい!
Esuke Nakamura



QUARTET vol.7

発行日 2016年4月7日
 発行 九州大学四国県人会
 編集長 田辺 梨紗(21世紀プログラム2年/愛媛)
 制作 QUARTET編集局
 早瀬 直人(経済・経営3年/愛媛)
 川人 萌(芸工・工業3年/徳島)
 坂本 真奈(文学1年/愛媛)
 Special Thanks
 中村 英介(工・物質科学2年/佐賀)
 樺澤大生(理・地球惑星2年/群馬)
 藤森 佳奈(理・地球惑星2年/岡山)

協賛企業 株式会社 新来島どっく
 九大前不動産株式会社
 記事・広告に関するお問い合わせ先
 QUARTET 編集局 publish.quartet@gmail.com

この冊子は発刊趣旨にご賛同頂いた企業様からの広告協賛により制作されています。本誌の情報は2016年3月現在のものです。本誌掲載の記事・写真等の無断転載を固く禁じます。



中村駅のすぐ近という好立地にある四国最大級の物産館「サンリバー四万十」。ここには四万十観光案内所が併設されており、四万十市周辺を観光するならばぜひ訪れてもらいたい。

「あるね屋」は新鮮な野菜や果物、地元の方々で作ったお惣菜や四万十ならではのお土産・銘菓・地酒が並んでいる地元密着型の物産館だ。いもけんぴや、塩けんぴ、カツオのたたき、仏手柑、サンリバーオリジナルの四万十みついもロールや生クリーム大福などが人気だ。サンリバー四万十はこの地域で初めての免税店で台湾、韓国、中国からも観光客が多く訪れるという。サンリバーにあるレストラン「いちもん家」では四万十ポークや、清水サバ、アユの干物など地元の特産物を用いたメニューが豊富であり、ボリュームも満点である。イチオシメニューは四万十ポークの野菜炒め定食だ。

ここでは物産館・レストランを通じて高知の海の幸、山の幸、川の幸すべてに触れることができる。

<p>あるね屋 〒787-0015 高知県四万十市右山 383-7 TEL 0880-34-5551 平日 8:00 ~ 19:30 土日祝 8:00 ~ 20:00 夏季 8:00 ~ 20:00 冬季 8:00 ~ 19:30 年中無休</p>	<p>いちもん家 〒787-0015 高知県四万十市右山 383-7 TEL 0880-34-5552 11:00 ~ 21:00 季節により変動あり (ラストオーダー 20:30) 年中無休</p>
---	--

※いちもん家(上の大きな写真)とあるね屋(下の小さな写真)の店内は、サンリバー四万十の公式HPより引用